大居士といった高貴な戒名まで与えてくれると嘆いている。」（仏教学者、ひろ　さちや氏）

「墓に森、林太郎」の外に一字も刻むなと遺言したと言う」（森　鷗外）

「又、生前から自分で戒名を付けて居ると言う「緑もゆかりも無いお坊様に勝手に戒名を付けられ「高々のお金まで払うのは不愉快だと言う」俗名でも良いから気軽に黄泉（よみ）の国＝死者の魂が行く地下、又、天国、あの世と現世との往来が気軽に出来る世になりたい。」（作家、山田　風太郎氏）

① 通夜、葬式は行なわない
② 火葬は家族、又、親戚で行う。
③ 祭壇、供物は無用。
④ お尚様のお経（読経）念仏等は絶対しない。
⑤ 戒名は絶対しない、本名をそのままに（位牌は作っておく）
⑥ 死亡の通知は無用。

著名人も一般の人も人間に変りなく、こうした風潮がこれからは、一般的になるのでは無いかと言って居ります。（三沢市　佐藤　進氏）

× × × × × ×

幼少の頃から良く老人や世間から左記の事を聞き、又、親から子、孫へと今でも日常会話で口伝えに話されて居るが子供の頃から聞いた事や、又、疑心点を掲げて見るが口伝されてきた由来と意義について御教示願い得れば幸いである。

1 一杯飯を喰べる物でない
2 餅を二人で引っぱる物で無い
3 人を真中に入れて回る物で無い
4 茶碗飯に箸を立てるな
5 大往生とは
6 虫の知らせとは
7 死后のお迎えとは
8 死者に持たせる六道銭
9 死装束を左前に合せるのは
10 死者を北枕に寝せるのは
11 末期の水とは
12 戒名の意味は
13 線香を立てるのは
14 ローソクを立てるのは
15 珠数の意味は
16 葬式と塩と木炭の関係は
17 死者はお経や弔辞を聞いて居るか
18 死者の追膳の意味は
19 春彼岸と秋彼岸は
20 お盆の意味は
21 四（死）花の意味は
22 霊魂はあるのか
23 回忌法要は何時まで
24 黄泉、天国あの世はあるのか
25 外国人もあの世に行くと同じ所か
26 僧侶はあの世での待遇は
27 蓮華や草花の意味は
28 地獄の沙汰も金次第と言うが
29 死者が霊界迄に着く期間は
30 あの世にも言葉があるのか
31 霊魂は何年存在するのか
32 あの世に行くと家族が一緒におられるのか

木造馬ッコ市風影

八月二十九日～九月二日

山中長三郎

木造町の馬コ市、明治三十六年、馬コのせり売りをはじめてから有名になったといわれる。

西北両郡の農村地帯を周囲にもつところから、明治末期から大正にかけて、この馬コ市には五日間の会期中に延七百頭の馬コがせりに出されにぎわった。

博労たちは北海道や南部地方から一人で三十～五十頭持ってきたという。当時は木造の〝馬コ市〟として全国的に知られていたそうです。農村の機械化が進むにつれて、今では馬コの利用少なく馬コ市は不振になったが、名称を〝馬市まつり〟と変え、趣向を凝らした催しを盛りこんでつづけられている。

敗戦後のある日朝起ると馬コ市に行く気になり、髪を整え、靴も磨き、「米の貴重品時」お米でようやくと求めた背広「洋服」を着て嘉瀬駅のホームの雑沓に交わる。

汽車がホームに入ると、我れ先に乗り込んで忽ち客車は満ぱいとなり乗れず、客車のあとに連なる無蓋の空貨車に残る数人が乗せられる。「芦ノ湖花見も当時はこのようなことがあった。」

ポォーと喊高い汽笛を鳴らして黒煙を蒙々と吐き出して走り行く風に煽られ、黒煙は貨車の中で渦巻となる。

私は頬被りをし、大切な背広は裏面に着る。貨車の中が一騒動のうちに汽車は五所川原駅構内に入いる。五能線ホームは満ぱいの人、人、木造行きの時刻にも間が大分ある、よし馬コ市まで「道程七キロ約」歩くことにする。

津鉄より来た人々にも馬コ市、目指して歩く者もいた。五所川原の商店街を通り岩木川の橋を渡りしばらく進むと道筋の両側は田圃が広まって、一面の黄金色の稲穂の彼方に超巨人の胡坐のような山裾の見える岩木山。

砂利の路傍には塵埃（ゴミ）だらけの雑草に混って白、紅、とさまざまの色コの小さな野草花コところ、どころさ咲いている。

〝そうだ〟木造町コ野草の花コのよう、馬コ市の騒音が聞こえてくる。何年ぶりだろう、馬コ市祭り。奇麗にされた駒（マコ）「ニオ馬コ」がセリ市に行くのに見とれていると、横あいから声コかける娘（メラス）コあった。嘉瀬のちょっぴり顔見知り娘コである。

娘コ急いで「回りを葦の編んだ物で囲み屋根は藁で編んだ（ノマ）をのせた簡単造りの出店」の食堂に入って行き、下駄コ持ってくる。

祭りの露店街に行くのだばこの下駄コ履くといいよといわれる。私は何にが、何んだか理解（ワカ）りかねている。

娘コがいうには、露店街には他邦人が破れてもない靴を脱がし修理しては法外の金を取っているという。下駄履となって、露店街に行くとなるほど、他邦人らしき屈強の若者等は下を向

いて往来の人の中から靴を履いている人を探しては、傍の修理する者に連れ渡す、ちょっぴりの修理場があり鋲の一個か二個を打込み法外の金残を取り上げていたのであります。

逆うと殴られ有金を全部取り上げられてしまうという。

そのような状況を警察が見ても見ぬふりである。

当時は日本三等国と他邦人に軽蔑され警察も手も足も出せない、馬コ市の祭りでありました。

祭り見物は早々に引上げて食堂に帰ると娘コはどんぶりを卓にのせて、自分も昼めしを食べていないのでと、もう一個のどんぶりを持って来て一緒に食べることになった。

娘コの話しによると昨日は嘉瀬村の若者が、例の靴修理屋に引掛り、村の暴れんぼと異名の若者は、隙間を見て逃れたが嘉瀬まで追いかけられて、親父が財布を叩き金を出して許してもらったそうです。

夜はセリ市の広場に盆踊りがたち大きい輪ができ、賑やかになるという。稲刈の迫った秋日の斜光は葦しの編み目の隙間を通して射す、かすかな光りが薄暗い片隅コの娘コの素肌の顔に注でいる、高等小学校を卒業されて一、二年であろう、私には娘コの年令は知らない。

お姉さんは、働きながら時々二人の方を見るので食堂は忙しくなった時刻である娘コにサヨナラを云って別れ娘コも入口でサヨナラを云って微笑みかけていた。

私の乗った五能線の列車は秋晴れの夕刻の野良を勢いよく五所川原に向って突き走る。列車の窓から見える祭りの森に向って、馬コ市、サヨナラ。

茨の花コ街道ばだね、埃かぶて、

それでも咲ェでる、茨の花コ「一戸謙三、作」

津軽弁　村の笑い話こ

「盗人の理屈」

村はずれの農道で、ガンチョのミツと、未亡人のサネが今にも咬みつきそうな剣幕で、にらみ合っていた。

ミツ「フトのおやじば盗んで、泥棒このっー」

サネ「なに盗んだばァ、おめだのおやじ、いねぐなったなァ、家ね居たべせぇ」

ミツ「フトのおやじばフパレバ、盗ったじもんだね」

サネ「フパタナー、おめだのおやじ、おいさ来ただてばァ」

ミツ「フトのおやじと、イグネことしたべ、ヘバ、フパタダでばなァ」

サネ「なにイグネことしたば、あめだのおやじば怪我さへだなァ、イダグさへだなァ　楽しまへだべせェ」

ミツ「フトのおやじば盗って、よくもソッタラだクチ訊ぐにいいもんだなァ」

サネ「おいさくるのも、おめえイグネハデヤ、ワ、おめえの代理つとめでいるなだね。菓子箱でも持ってこなが」

（森　平）

『青森県「歴史の道」調査報告書』補置

岩木川水運や蒔田集落等について

～伝承を中心に～

白　川　兼五郎

金木に残る伝承においても最も重要な役割を果したものは、河川即ち水運であるという。ここにいう水運は岩木川水運であり、岩木川は物資輸送の動脈として重要な役割を果していた。そして輸送物資中の主要なものが、津軽の桧であった。

中世においてこの水運と桧を管轄したのが安東氏であった。金木の伝承では、前九年、後三年の役に敗れた安倍を追討してきた源左衛門四郎義英軍は、当時まだ内海が開けていた金木以北を渚沿いに道をとり、山王坊まで行ったという。山王坊の仏閣は金銀をちりばめ、また砦は堅固であった。しかし都から上った将兵たちは心からもてなされ、歓喜の内に和議が成立、こうして半島中央の水の流れ清い金木の地に舘が築かれ、後に安東氏隋一の所領となったとされる。

そして安東氏の命によって桧山から上がる資金を浪岡北畠氏に上納する役目を担つのが金木領主の役目であったという。

安東氏は、岩木川に注ぐ各大小の河川が金木に合流することから、ここに川湊を開き、十七万坪という広大な貯木場を造り、国中の木材を一旦ここに集結するとともに、木材奉行を各所に配置したという。

江戸時代、全国各地の弁戝船は十三湊より大川（岩木川）を逆上り、蒔田の中継湊で積み荷（生活物質、瀬戸物など）を揚げ、歸りは主として橋の板割したものを船積し、丸太は筏で運んだという。こうして中継ぎ湊の蒔田は積み荷の交換で賑わいを呈したとされる。

×　×　×　×

蒔田の鎭守様の金毘羅宮は、中世期に上方の船主たちが四国の本山から金毘羅様の分身を勧請している。また岩木川と十川の合流地点に鳴門という地名がある。春の出水や土様の出水の時などは、その合流点で小舟がひっくりかえる程の渦巻きを起こしていたことから、上方の船主たちが『此処だば鳴門の渦潮だ。穏やかな時でも此処は鳴門だ。』として名付けたという。平成二年に新しく架けられた五所川原市と蒔田間の橋も『鳴門橋』となっている。

蒔田は金木の一村落に過ぎないが、八十戸には似合わない広い湊町街道が一直線に拓けている。昔は風待ちの関係で逗留日が長くなると、積み荷歸りの船方衆や荷受け商人が、退屈しのぎに綱賭行事や踊りなどを行ふお祭り広場であったという。

×　×　×　×

金木本町から神田橋への通りを、明治の頃まで十三舘岡街道といっていた。古い街道で、金木～不動林～蒔田～神原と続く。

不動林の中頃に不動宮がある。近くに一里塚がある。四百年を越す老松があり、古い百万遍が二基、弘法大師坐像一体がある。昭和の頃までここに慈善草鞋が掛け置かれ、旅人はおし戴いて履き代え、旅を続けたという。過ぎ来し方の人の情と善意に心暖まる思いがする。

ここを過ぎると不動宮の西側にこの村の古い墓地があり、そこに津軽統一で滅んだ金城之舘の領主対馬右衛門太郎義英の墓がある。『金木古今昔物語』（昭和五六年）を書くための調査の際に解ったもので、『年忌記』という古文書に『領主対馬石衛門太郎儀英、寛永二乙丑年十一月二十四日死去、法名不分、金木不動林村ニテ死去、同所墓有之ト云共不分、治右衛門と申者墓に可有之哉と云々、右衛門太郎妻、一切不相分、右同所』とある。

二百五十年程前に不動林村に共同墓地が移ったが、開村当時の墓が七基残っている。その中に『享保五庚子歳、為法林昏英居士百回忌建立、正月二十五日、白川氏』と刻まれたものがある。白川治右衛門のことで、奥方の実家の白川家で百回忌を弔ったのであろう。現在白川家の子孫は金木町に在住している。なお、戸数二百戸を数え、全て金木山雲祥寺の檀徒である。

×　×　×　×

さて、六百年前に領主が開田したという八十町歩の美田は、今でも金木の内田といって不作知らずの水田である。この水田を領とともに藩政以前まで何百年も管理してきたのが治右衛門一族である。

金木の伝承によれば、元禄五年頃大導寺等が藩命で地検で来た時、黄金に色づいた八十町歩の美田を見ていったことから藩中の語り草になり、それがきっかけとなって、その六年後、雲祥寺出身の武田源左衛門貞清と豪商弘前金木屋一族の立案で、津軽三新田の大事業が始ったとされている。

雲祥寺は領とともに長い年月、桧山管理に当り、森林資源の

活用に秀でていたのかも知れない。なおその財源の大方は桧の良材であったいう。ところでその領主は桧山管理で経済的にも力があったのか、金木川上流より水を引き、中世時代に街の眞中に飲料水の小川を通している。金木川が町を流れているが、木材輸送の季節は飲料水に事欠けていたという。その小川の流れ落ちる所に開田されたのが八十町歩の美田なのである。

なお、領主右衛門の奥方は白川治右衛門家から出ている。領主は百姓治右衛門宅に聲居を命ぜられ、同所で没したことから白川家の墓地に葬られたのであろう。又は雲祥寺にあったのを命により移されたのかも知れない。

×　×　×　×

明治二十年頃までは、カコといって、大川の水量の少ないときに川登りする小船を陸伝えに綱を引くことがあり、若者には良い手間仕事であったという。弘前浜の町に船が着くと町は賑わい、帰り船は親方がサツマイモを一俵も買って、船の中で沸かして食べるのが楽しかったという。この頃はまだ金木地方にはサツマイモがこなかったのかも知れない。田茂木村生れで九十三歳になる大佐賀三次郎氏が、この頃の仕事を思い出して話してくれた。

金木には木挽衆と手斧打ちという職人が多くあって、明治に入ってからでも三十軒も数える程であった。桧の良材を木挽衆は三尺八寸もある広い鋸をツボ糸線をたどって挽いて行くのであるが、金木川沿いに木材工場があって、各所に丸太があげられ、木挽衆や手斧打ちが活躍したのだという。板材や角材にしなければ船積みされないからだろう。いわば製材工場の前身であり、明治の代に第一回の大阪博の時、金木村長白川重治がドイツ製といわれる丸鋸機を買って来て始めたのが製材所の始めであったという。また秋田の秋木の前身も同時に買って来たという。

◇　◇　◇　◇

この重治村長の祖父までは代々治右衛門を名乗っており、また開村以来の屋敷には鬱蒼として樹木が生え、寺のような大きい茅葺き屋敷であった。何回となく建て替えたのであろうが、今の家も二百五十年も経ているのではと思う。

明治三十二年に初代師団長立見尚文中将が一週間も宿泊しているが、その間門前に歩哨が立っていたという。昔の面影が無いとしても、町の文化財に等しいものである。名工堀江佐吉翁と親しい仲であった白川重治の製品は、川を逆り堀江組に使用されている。最勝院五十塔の脇にある佐吉翁の高い記念碑には白川重治の名も見えると思ふ。

◇　◇　◇　◇

色々述べて来たが、古代より人類の文明は水辺に栄えてきたという。水の流れにより水辺は径（みち）となり、道（みち）となり、街道となったのであろ。

◇　◇　◇　◇

金木の津島家について述べたい。伝承では千年も前から中世

末期まで金木領主は連携として続いているが、この間、時世の流れで源氏から対馬を名乗り、一時は新田を、そしてまた対馬となり、津島となっている。

大昔から書き記した伝説が多くあったが、城が取り潰されて隠し伝えていた大筋のものが後に出て来た。

明治になってから、当時の若き当主津島今五郎は、菩台寺である南台寺の和尚にこれら文書を差し出している。そして金木の物知りたちが南台寺に集まり、文書の解読勉強会を開いていたが、惜しいことに南台寺の庫裏に置いた古文書の入ったつづらが、明治三八年の寺町の大火で、寺・庫裏ともに焼失してしまった。

津島家では代々何百年も語り伝えている語部の掟があったという。戦前今五郎氏は次男八十八氏に、語部のことを話しても、また今頃落城の伝記を話しても世間の物笑いになるとして、話さなかったという。その後八十八氏は県庁に入り定年退職、太宰治と同年であるから、現在八十四歳になるであるが、三年程前に亡くなっている。

しかし由あって今五郎氏は二年程の間に私に、金木の伝承を語ってくれた。私は伝承に偽りはないと思っており、城の溝へや、掘跡のこと、また北畠が滅んだ後、一時期新田宗興の名で相馬にある高貴な方の御陵の守護に行っていることなど、いずれ書き残しておきたいと思っている。（成田亀逸氏蒐集資料より転記）

金木城址の所在は
青森種市有隣氏の文献から判明
同町の中央部にあった

五所川原町郷土史研究家の福士貞藏氏は、今春以来北郡金木町の依頼により金木町誌の編纂に当っているが、これが資料の蒐集中、これまで地方の故老間（金木町では）に言伝えられていたが、その所在の全く判らなかった金木城址が意外にも、同町の眞中にあったことが、青森市北片岡種市有隣氏所有の『方々由緒記』によって発見された。

氏は語る。

『金木町の西端に高屋敷と称する所があるでしょう。其處は名の如く立陵地帯で、東西五・六十間、南北百間以上に亘る広大な地域で、その中央部を現在では県道小泊線が横断している。

ところでこの地は西北は一段と低く芦野と称する水田となっているが、湖水時代にはこの湖中に突出せる崎があったろう。

又東には冷水と称へる沢があって、昔はこの谷間を巧に利用して塹壕とし、その一角は丘陵地帯に連続せる関係上、この方面へは特に幅四間以上の濠を堀り、土壘を築いて防禦を堅固にしている。

南には金木川を控えた要害地で、現今では町家が城郊内に二十戸以上も建てられ、風当りが強いと云ふので、地下げをし、それがために昔の濠跡は埋められ、また土壘も取除かれている。

然るによく見ると今尚その濠跡が歴然としているから、これまで単に言伝えに過ぎなかった金木城跡の全貌がうかがふに難事ではない。

此處は文献によると、天正の昔に津島右門太郎と称する豪族の居った館である。当時は末だ隣村喜良市村辺りに佐助乙名といふアイヌの酋長が跋扈（ばっこ）していた時代であるので、かかる堂々たる館を構えて住戒したもので、口碑に金木にお城があったと伝えられるのは即ちこれをいうのである。

この右門太郎の子孫は連綿として今日に至り、現在の戸主をば津島今五郎氏といひ、高屋敷内の中心に居住を占めている。』

交通の変遷について

佐野　駒三郎

今でも年とった人は覚えていると思うが、つい最近まで弘前—藤崎—原子—飯詰—中柏木　狐崎（奴温泉）—嘉瀬の古町を通った。

それ以前は原子—飯詰—中柏木—小田川—忌来市—川倉の地蔵様—宮野沢—中里、その前となると飯詰—味曽ヶ沢—苗穂—小田川—喜良市—地蔵様—川倉となっている。私の家は弘前より在宅した関係上、弘前へ嫁に行った人もいるし、私の父も父の兄も嫁に行った人につれられて実家に来るのに狐崎を通って往復した話が残っている。

それが、嘉瀬の溜池と長富の溜池が出来て、そこを通り五所川原へ行く道路が出来たのはつい最近であった。

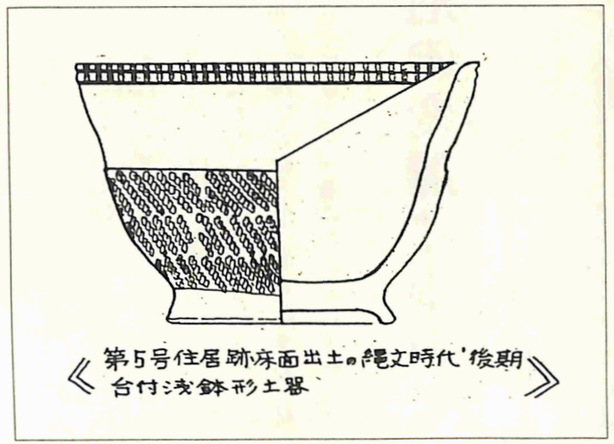
それについて、長富の其田弥右ェ門の由緒書に、嘉瀬『清久』なる人が、清久溜池、長富の溜池は、其田弥田郎氏が、文政七年（一八二四年）今を去る百五十年前で、毘沙門—長富—嘉瀬—金木と道路が出来たと書いてある。

両方の溜池が出来た完成祝いに、偉い人を呼んだ時に『奴踊り』を見せて、大変喜ばれたといわれている。

そのほか、嘉瀬と喜良市の道路は、通称西公道路と呼ばれているが、それは喜良市の西村周三代が、二十八才で村長となって作った道路である、約八十年ぐらい前である。又金木への道路は八幡様の前を通る道路が昔の道路である。

昔の道路は十三潟の関係と、つい最近まで喜良市に八重、嘉瀬のスキー場に佐助と云う二人のアイヌの酋長が居り、そのアイヌと関係をつけないと通れない事情があったから。

金木町神明町遺跡
現地説明会資料



昭和53年度
青森県教育庁文化課

一、調査までの経過と調査の目的

神明町遺跡は藤枝溜池（通称芦野湖）周辺で確認されている多くの遺跡のうちのひとつです。

かって、わらび手刀や、須恵器（いずれも金木町歴史民俗資料館に展示中）が出土し、上師器が地表面に散布していたので平安時代頃の遺跡として知られていました。

さて、津軽地方は日本有数の穀倉地帯であり、我国にとって食料供給地となっていますが、稲作栽培に必要な水をどのように確保するかが永年の懸案でありました。

そこで農林省では小田川上流にダムを築き、ここから計画的に放水することによって、水不足の解消に努めることにしたのでした。

たまたま藤枝溜池に給水するための管が、この神明町遺跡を通ることになったので、その工事に先だって、発掘調査を実施し、調査記録として後世に残すことになりました。

二、調査の概要

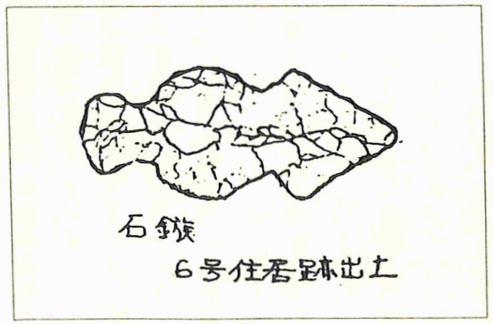
今度の調査は、昭和五三年六月十九日から十月三十一日までの予定で実施していますが、これまでのところ縄文時代と平安時代の人々の生活のあとや遺物が認められています。

縄文時代のものとしては、後期の住居跡が二軒、晩期の墓が一基、また平安時代のものでは六軒の住居跡が、多くの土師器や須恵器を伴って発見されています。

三、主なる遺構と置物

(一) 縄文時代の住居跡（二軒）

直径が約五・五mの縄文時代後期（約三、〇〇〇年～四、〇〇〇年前）の住居です。地



面をおよそ五〇m位掘りくぼめて作られています。

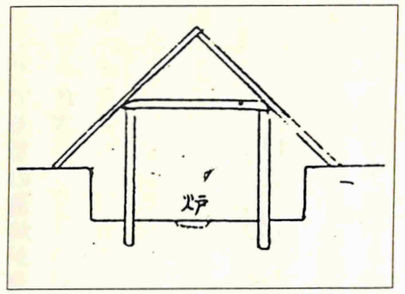
これらの住居跡からは、縄文土器のほか、石鏃、石冠、石斧その他の刃器などが見つかっています。

(二) 平安時代の住居跡（六軒）

一辺が四mから八mの方形をした竪穴住居です。どの住居にも煮炊き用としてのカマドが築かれており、縄文時代の住居が床面ほぼ中央に炉を持つのとは異っています。

発掘範囲が狭いため完全な住居はなかったが、四号住居とした一辺八mの住居には須恵器大甕をはじめ、壷、土師器坏、作業台とされた台石など、多くの遺物が残されていました。

これらは当時の生活を復元するうえで極めて重要なものです。



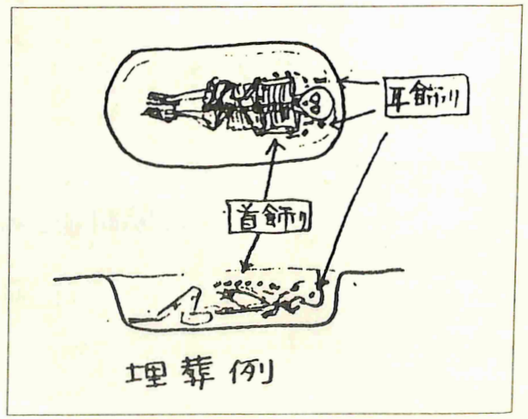
またカマド内から、かなりの骨片が見つかっていますので、これを分析することにより食生活の一端を知ることができるものと期待されています。

(三) 土拡墓（一基）

長径一二〇cm、短径九〇cmの楕円形で、確認面からの深さ三〇cmの縄文時代晩期（約二、三〇〇～三、〇〇〇年前）の墓です。

この土拡墓からは副葬品として、台付鉢形土器とヒスイの匂玉が見つかっています。これらは死者が生前所有していたものと考えられ、埋葬と同時に副葬されたものであろう。

縄文時代の墓には、このような土拡墓のほか、甕棺墓や石棺墓が知られているが、大部分はこの場合と同じく土拡墓に埋葬されたと思われる。



(四) まとめ

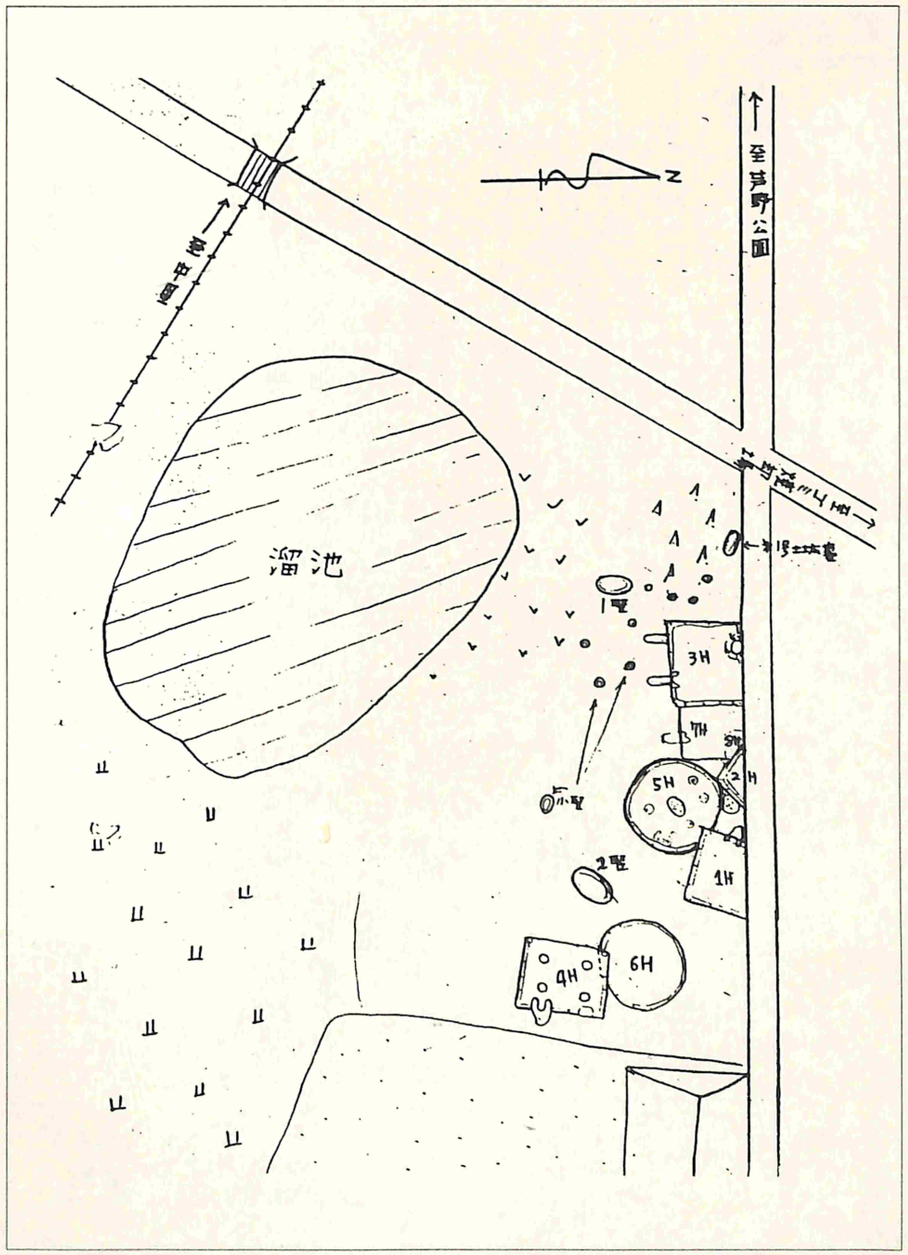
神明町遺跡の調査は、現在継続中ですが、これまで明らかになったことを列記すると次のようになります。

(1) 縄文時代の住居跡二軒、土拡墓一基、平安時代の住居跡が六軒確認されたこと。

(2) したがって、この神明町遺跡は、およそ四、〇〇〇年前といわれる縄文時代後期から、今日まで、継続的に生活の場として使われていたといえる。

(3) 特に四号とした住居跡からは、生活当時そのままの姿

で多くの遺跡が発見されており、貴重な調査となりました。



《神明町遺跡略図》

筆名・太宰治

山中正津

本名津島修治の筆名は太宰治である。太宰治を名乗る前にいくつかの筆名を使っていた。

それは、ある年、用事があって東京へ行った時の話である。東京の四ツ谷坂町に、私が小学校三年生四年生の時に教わった土岐兼房先生が住んでいて、川口市の小学校に勤務していた。その夜の宿は四谷の、現在の文化放送の近くの曹洞宗のお寺であった。土地不案内の私は、東京都区分地図帖を開いてみたら、坂町へは歩いて行ける距離であったので、訪ねてみた。先生は同じ村の教え子である私を歓迎してくれ、いろいろ村のニュースや知人の近況を聞くなどして時間の過ぎるのは早く、そろそろ辞去しようとしたら、先生の奥さんは、「こんなせまい家で泊ってもらう部屋もないが、東京へ出て来たらいつでも寄ってください。私は身体が弱いのでなんのお構も出来ませんが、津軽のお話を聞くだけでとても楽しい。」

そう言えば、奥さんは内潟村薄市（現中里町）の出身だった。先生は、「君に一つ頼みたい事がある。急がなくてもよいが、確か弘前の市立図書館を探せばあると思う。昭和四年か五年に『座標』という本が出ていたんだよ。その本に私は浅川修のペンネームで『捨て米』という小説を書いたんだ。探して見つかればコピーを取って送ってもらいたいんだ。その座標には、隣り町の〈源のオンチャマ津島修治という人が、大藤熊太の筆名で『地主一代』という作品を発表している。」

私は弘前の図書館に行く機会もないまま数ヵ月が過ぎた。翌年また東京へ出た時、干し餅を二連ほどお土産に持って土岐先生宅を訪問したら先生は、「あ、前に話した『座標』は見つかった。君にコピーを一枚やる」と言って、浅川修の筆名で書いた「奪還—娘—」、「捨て米」、「火を放つ」、「闘犬とくむ」などの作品が載った東奥日報の切り抜きのコピーを渡してくれた。「座標」には童謡やプロレタリヤ短歌をトキカネフサの名で発表していたようであった。

話は外れたが、その座標に津島修治が「大藤熊太」のペンネームで小説を連載していたというのである。